

の避難民生活にあえぐ。子供は麻疹にかかった五歳の史郎君と三歳の洋志君は抵抗力があつて助かったが、一歳の義樹君は麻疹の病後、消化不良が続き、呼吸困難となり、ついに息絶えた。

三男を亡くして、悲しみも消えないうちに産気が近づき、二十一年三月一日陣痛が始まり、暴動の最中、主人もいないところで男の子を出産した。

昭和二十一年六月三日、奉天から引揚げが始まり、親子四人は筆舌に尽くしがたい苦難を経て、故国にたどり着いた。

故郷に帰って「故郷はありがたきかな」と感激の涙を流した。君子さんは、教員に復職することができ、三十有余年間勤めて定年退職した今日、「戦争は二度とくりかえすな」と祈念している。

(岐阜県引揚者団体連合会)

理事長 川村 一正)

惨めな逃亡者の足跡

愛知県 川口 吉夫

郷土校卒業後、実業補習学校二年修了、現役志願兵として豊橋騎兵第二十五連隊に昭和七年一月十日入営する。七カ月間の初年兵の教育と目標は満州であると厳しい訓練も済ませ、昭和七年九月二十八日、満州へ派遣の命令が下る。家族にも告げず、連隊を深夜に立、豊橋西駅から貨物有蓋車に愛馬と共に乗車。行く先も知らず駅構内は人影もなく、汽笛も寂しく響き渡り発車をしました。

豊橋駅から東海道沿線では、日の丸の旗を振つてくれる人たちがおり、白く揺れて桜の花が咲いたようである。中には列車と連行している道を一緒に走って送つてくれる人もあり、有り難く出征をする気持ちがあわいてきました。到着したところは神戸港で人馬一緒の乗船。兵器の積み込みを終わり、昭和七年十月一日、神戸港

埠頭を貨物船で出港しました。

甲板に全員集合、最後の本土との別れを、わずかだが見送ってくれる人の投げたテープをみんなで切れるまで握り締めていた。船は次第に陸地を離れ、山の峰も薄く消えていき、二度と帰らじと誓う心をだれが知ろう。暗い夜空を眺めながら、しばらく日本にいる友の笑顔を浮かべていると、班長の大声がして、愛馬の給水時間を知らされ船底に下りて行きました。三泊四日の渡航に船底で愛馬と共に暮らし、昭和七年十月四日、大連埠頭に着きました。船底生活で体調が変わり、頭がボーッととなって甲板に出ることを許され、大勢の戦友と狭い階段をよじ上り周りを見ると、すでにみんな手足を動かし運動をしておりました。

大連港街の夜景は美しく星を散らしたように電灯の光が照らしており、別世界にみえて、しばらく眺めておりました。夜が明けてきて霞が消え、だれかが大声で叫んだのです。「大勢の女学生が我々を迎えにきたぞー」見ると大小の集団が近づいてきて、みんなの視線が群れに注目して驚きました。女学生ではなく満人

の荷物下ろし、運搬する苦力（労働者）でした。女学生と間違えたのは運搬するのに白い布を肩に掛けていたからです。大連埠頭に上陸し馬繋場で野宿を行い、三日後に満州鉄道に乗車し、行く先は知らされず、着いたところは帽兒山ぼちじさんという小さな駅でした。この地から朝鮮との境界に沿って白頭山脈連峰があり、裾野を隠れ場所とする匪賊馬賊を追って掃討に向かう騎兵第四旅団第二十五連隊でした。全滿各地域で転戦し、昭和八年十二月二十日興安南省通遼市において現地除隊満州国官吏養成学校へ入学予定のところ、第十四師団除隊者が凱旋の雰囲気に向け内地に帰還したため、人員が不足し開校延期となりました。当惑し就職しましたのが、新京市関東軍大陸鉄道司令部でした。

せっかくの喜びも束の間、体調が悪くなり医師の診断の結果、脚気とのことで休養していても歩行困難となり、仕方なく内地に帰り闘病生活を送りました。帰郷により体調も次第に回復し健康に戻り、昭和十二年四月再び渡満し、採用されていた大陸鉄道司令部へ再就職しました。

軍隊輸送司令部に就職、間もなく張鼓峰事変、ノモンハン事変と間断なく事変が勃発し、大陸鉄道司令部は奉天市へ移駐したり、大東亜戦争勃発から関東軍司令部と共に通化市へ移駐し、軍隊輸送業務を執行していました。

昭和二十年八月十五日は大東亜戦争終結の日であります。ソ連は満州国境を越境し重戦車の大群が先頭に立ち進撃してきた。日本軍の主力部隊は南方に進出しわずかな留守部隊により交戦、邦人を一人でも多く南下させるため鉄橋や橋梁を爆破して、ソ連軍の進撃を阻止するため苦戦をしているのに、一方では国境の陣地構築に満人労働者が徴用されていたが、監督者がいなくなったため、労働者が我先に列車に集団で乗車し、下車地域で強盗略奪がはじまっていた。無警察地帯となり、治安秩序が乱れ恐ろしい世相に変わり、対策もなく自身で守る以外は仕方ない状況でした。新京市駅前順大病院家族九人が空気注射をし一家心中したとか、新京神社境内で数人の方が切腹したとか、新京市でも大勢の満人を使用していた牛乳加工場の三宅牧場

の娘さんが拉致されたとか。

一夜にして世の中が変わったため、家族も朝鮮の京城へ疎開することになり、着の身着のまま新京駅を出発しました。見送って新京市駅前、日の出町二丁目、日の出ビルディング代用官舎二号室へ帰ってみると、暴徒が侵入荒らした後であって、寝る場所もなく大陸鉄道司令部へ行きました。司令部はソ連軍の指令により新京市郊外四キロ離れた南嶺警察学校跡へ移転することになっており、軍使の指示で武装解除され捕虜となつて集団生活にはいりました。

大陸鉄道司令部では草場辰巳司令官以下十五人がソ連の飛行機でモスクワへ送られた。戦闘をしない部隊は工場などの機械類を取りはずす作業をし、モスクワに発送した後、内地に復員する。ウラジオストクを経由し直接内地に帰還されるとか、又は、ソ連へ送られ強制労働をさせられるとか、流言飛語が交わっていたが、結果はソ連邦へ送られ強制労働をすることでした。

私は上司の指示を得ましたところ、軍人ではないか

ら新京市に知人があれば頼って行くのがよいと言われましたから、ロシア語通訳の有賀さんと相談し脱走することを考えました。

十五日間が経過したころ司令部の食糧を関東軍倉庫にトラックで受領に行くことを聞き、この機会を逃さず同乗させてもらい、途中で逃亡を計画し、実行しました。一緒に脱走した者は六人いたのですが、満語が分からないのと頭がざんばら髪であつたから、警察官とか軍人であると思破られ、再度捕虜收容所へ戻されたと聞きました。通訳と私はそれぞれ無事知人宅へ着くことができてお世話になったが、外出はできず、数日は部屋の中で掃除をしたり体を動かすことにし、病気になるぬよう気を付けておりました。収入の道はなほかに二人の疎開者もおり、生活に困るのでその方と相談し、私たちは別れて暮らすことになり、新京市満鉄病院西隣りの今辨慶骨接医院の応接室を借用移転をしました。二人は女性で福岡県直方の出身者で、女性だけでは暮らせない物騒な世相ですから、男子の私と共に生活をしたのです。

大陸鉄道司令部を離れる際、酒井主計少尉より受領した五千円を胴巻に入れ、必要に応じて使用しており、三人が六カ月経過すると生活費が少なくなり、二人の娘が内地から持参した着物を一枚、二枚売り生活費の助けとし、もちろん収入を得るため、働くところを探したがありません。仕方なく娘たちは頭を虎刈りにしてモンペ姿で街角へ天幕を張り、甘いぜんざいを一杯二十銭で売り、内地に帰る日待ちました。

その折、大陸鉄道司令部で共に勤務した熊本県出身佐藤曹長が、逃亡に成功し尋ねてきて、同僚の安否を窺いながら、収入を得るため武器収集について話された。今、中央軍（正規軍）が各地域において軍備の充実を図りたくとも武器が不足、必要となつていたので、当時、拳銃一丁二千円軍刀一振り五百円で買うので、知人が持つていけば話を勧めてもらいたいという。それには信頼される人でないと駄目であり、君は顔も広くそれにお金になるからと言われ、その気になり斡旋しようと思いました。なぜならば、日本人は最期の自決のために拳銃とか短刀を隠し持つ人があると思いま

した。そして、終戦一カ年近く収入なく、経過すれば生活にも追われるし一家が飢死する。それならば、お金に換え食糧を求めたい者がいるだろうと思つたからです。ただし簡単にできないことであつて、再三武器所有者は隣組長へ届け出るよう中央軍より伝達があり、なお隠匿者が発見すれば重罪にする厳しい達しであつて、友人宅を訪問し、お話しても提供してくださる方はありませんでした。

間もなく八路軍と中央軍の市街戦が勃発し、中央軍が後退し八路軍が市政を執行することになりました。八路軍が侵入してきましたので、武器収集の話は途絶しました。

市街戦には双方に日本の兵士が参加しており、戦車も日本軍のもので敗戦となれば皮肉なものです。再三の市街戦で残されている日本人の妻子が流れ弾に当たり、大勢の犠牲者が出ました。六カ月前までは平和な暮らしてました。無警察地帯と変わった現在は外出するにも恐ろしく、ソ連兵士が先頭に立ち、強姦、強盗は目前で行い、銃口の前には立ち向かうこともできず、

日本人残留代表者がソ連軍司令官へ陳情に行きました。回答は「乃木將軍が教えた」とのことであつて、治安はますます悪化するのみ。防空練習用に掘つた塹壕内に裸体で死んでいるのは日本人であつて、満人は死人があれば着ている衣類を略奪する風習があり、公然と血のついた衣類を売買する市場があるのです。

昭和二十一年終わりになると、生活に困り、親子飢死寸前の岐路にあつて道端で我が子供を満人に売っているではありませんか。当時二百門程度でした。満人は日本の子供は知能優秀であるからと言つておりました。毎日悲惨なことが起きており、戦争に負けた惨めさを体験するのです。いつ内地に帰れるか、沈んだ気持ちで暮らしておれば、病気になるからと野菜作りを思い付き、新京市広安大路に将官級の官舎がれんが塀で囲まれ、広い庭が荒地となつているので同居している娘と二人で開墾し、野菜種を蒔く準備をしました。

物騒な世相であるから外出はソ連兵のいない道を選び、遠回りして目的地に行くようにしていた。

その日は秋晴れて翌日は種蒔きのできるのを喜び帰宅する途中、家で留守番をしていた娘が、八路軍兵士に付き添われ馬車に同乗してくるではありませんか。前まできて停止したので何事かと聞いても娘は泣くばかり、通訳が近づきこの人ですかと言うのです。何が何やら分かりません。馬車に乗ってくださいと丁寧な言葉で言うので乗車しますと、家に向かい走りだし玄関に到着、驚きました。

前は三井物産会社の広場ですが道を通る日本人には通行禁止となり、広場に集められていたのです。大勢の人が開放され、通りながら私に注目し、どんな重罪人かと顔を見て行くのです。通訳に何ですかと尋ねました。「貴殿は武器を隠匿しているでしょう」「夢のようなことです」と答えますと、「隠しても無駄です」同伴した満人を指差しました。その満人は密偵だったのです。以前、中央軍武器収集を佐藤曹長を通じ依頼に来た折、同伴した満人であったから、嘘の口実をしなくてはと直感し、「屋形飲食店で酒を一杯飲んでいると何部隊の者か分かりませんが、武器を南嶺の忠霊

廟へ隠したとか言っていました」「それでは八路軍司令部に行つて話してください」と。馬車の前後に一個分隊の兵士が着剣で護衛し、着いたところは満州国煙草専売公社跡でした。一室に鍵を掛け閉じ込められました。翌朝、隊長の呼び出しにより質問され「武器はあるのか、君は何部隊にいたのか」頭がざんばらであるので軍人と見て聞くのです。口からでまかせに答えました。武器については通訳はどこに隠したかといろいろと話を持ちかけてきました。同じ返事を繰り返しておりました。

二日後に武器を隠したと聞いた忠霊廟へ案内することになり、一個分隊が編成され、嘘を言ったことを真実にするには行かねばなりません。南嶺に二キロ馬車に乗り現地に着いても、忠霊廟（満州国建軍戦死者霊場）は初めてなので分からず、指揮者の言うままに動きました。廟の床下に入れと指示するから、薄暗い苔のある所を探すふりするものもつらいことでした。新しく掘った所だから掘れと言われ、手で掘っていると、八路軍兵士の死体がでてきました。ほかの部隊の兵士

が現われ、何やら話をし警備態勢を整え、早々に引き揚げました。部隊に戻り間もなく、通訳から、隠した場所を知っていて話さないと拷問にされると言われました。

その夜は疲れていても寝具もなく、眠たくても睡眠できず、心配に耽けつていっているうちに夜が明けた。外は天候も悪く雨が降っており、その後数日を経過しました。施設された一室に閉じ込められ、食事、便所も監視兵同伴で、そんな折、屋外で日本人の大勢の音が聞こえてきましたので、通訳に尋ねると水洗便所の水が流れないから、日本人が掃除にきていると教えられました。彼らによると、西安地区よりきたが、水洗便所を使用していないので、二日も立つと水が流れなくなるとか話をしてくれて大変嬉しかった。

数日後通訳から、白状するまで拷問にかけられまよと伝えられ、二人の兵士に後ろ手にして荒縄で縛られ吊し上げられた。佐藤曹長が心配をし隊長に早く出してくれるよう陳情し、新品の長靴を提供したが、その靴で吊るしてある体を蹴とばされ、今でもその後遺

症が痕になっています。時計の分銅のように揺られているうちに意識を失い、気付いたときは鼻の先に薬の臭いがしておりました。しばらくして通訳が武器隠匿は重罪であるから、隊長が明日十二時を定刻とし鋸引きの刑罰を執行するから覚悟するよう宣告をされました。

その時、脳裏に浮かんだのは鋸引きにされるより銃弾により死する方が良いと決心し、逃亡を決断、計画を胸の内では考えました。在満十有余年間に知人が匪賊に拉致され、興安嶺原野で逃亡し、成功した体験談を思い出しました。それによると後ろ手に縛られ一列縦隊で進んでいて綱をとかれるときは大便を願うことと、監視兵が油断するし、一人残って待っているから本隊より少し遠くなると呼びだし、用が済まないと返事を強くして一秒でも一歩なりとも本隊から離れ隙を見て、一生懸命に走って草木の陰に体を隠し、生き長らえたとのこと。そのまま参考として実行をすることになりました。

宣告を受けた時点で、小便をしに監視兵に伴われて

行きますと、水道栓の鉛管が詰まり水が溢れて足首までありました。満人は水にはいるのを特にきらいます。軍靴が綿で作られているからです。監視兵が入口で小便を済ますよう手真似をしましたが、下心があるから聞こえないふりして奥へと進みました。電灯が二カ所にあるのがちょうど故障して消えており、入口のみ点灯しているではありませんか、入口から見ると暗くて見えないが奥から見るとはつきり見え、小便しながら出口はないかと探した。後方から風が吹いてくるのが気に止まり、窓を見ると、二重硝子戸二枚とも破損して風が入っているのを知った。

翌朝、屋外の状況を目で確認すると便所の窓から直線で三十メートル離れたところに高さ三メートルの土塀があり、その土塀に丸木二本渡してあり、ちょうど見ているとき兵士が渡って行くのです。現在閉じ込められている部屋の出入口は、東西中央三カ所であり立哨二人で厳重なものであった。兵士の秘密出入口を胸裏におき、逃亡するには今夜決行と心に誓い、夜の更けるのを待ちました。

深夜になるにつれ目は光り興奮し、体が震えてきました。どこかの時計が深夜の十二時を知らせるのを耳にして、立哨の交代があつたから今しばらくと我慢し、はやる気持ちを鎮めました。態度を変え、腹が痛いとは歩哨に申し出ました。早速、便所へ行けと指示するのでよろめくふりをして向かいました。前日拷問をうけ、足で蹴られたり、吊るして気絶しているのを兵士は知っているので、丁寧な扱いでした。便所は水がたまって足首まであり、大便だからと独りごとを言い、暗い便所に入り、一直線に窓の硝子が破損しているところへ手探りで進み見つけたとき、余力がはいったため、半身外へ出た途端に投げ出され外の硝子戸が観音開き戸であつて、破損した枠に左足のかかどが掛かり、落ちる瞬間に上部の二枚硝子を破損した。凄い音が響き渡り、どのようにして屋外の土塀に渡してあつた丸木を通って逃げて来たか夢中でしたので覚えていません。気が付くと、日本人住宅の間にある小道に出て、南嶺街道に向かつて歩いておりました。自宅に向かえばだれもが察知するところです。反対方向へと走り続け、

約一キロほどきた地点で立ち止まり、兵舎の様子を窺いました。電灯下を兵士たちが右往左往し混乱しているのです。夜が明けないうちに隠れ場所を探さなければとやる気持ちを抑え、頭に浮かんだのが馬場中尉の代用官舎で、南嶺に通ずる街道に出て方向をまず確かめました。電灯の明かりに照らされ、そのまま徒歩で行けば遠い所まで人のいるのがわかってしまいます。ちようど道の両側に街路樹が十メートル間隔で植樹されており、建国当時の植樹で大木のこの樹木を利用し、木を背にして進みました。馬場さんの住宅近くに行こうとすれば犬の遠吠えで進むこともできず、夜も明けってきたので困惑しておりますと、露店商の手押し車が集めて置いてあったので、その陰に体を隠しておりました。

間もなく、パタパタ団扇の音がするので陰から覗きますと日本人の方です。北満の国境にいてたどりついた疎開者が、早起きして露店商に行く支度をしていたのです。その方に馬場さんの住宅を尋ねますと、道の向かい側にいることを教えてもらい、少し気持ちが緩

み、助かったのが嬉しくて馬場さんの家に近づきました。ところが八路軍の派出所ではありませんか。大きな電灯の明かりが照らしていて派出所内を窺うと電話をしておるのです。幸いにも電柱の影を利用し向かい側へ渡ることができました。馬場さんの住宅は周囲が板塀になっており、飛び越しましたが、呼び起こすことができません。派出所が近すぎるからです。物置小屋がありましたので手探りで中に入り、少し軟らかな所があったので、腰をおろしたら命の助かったことの安心と疲労のため、その場所ですべて眠ってしまいました。

炊事場の水を流す音に目がさめ、裏戸を叩きますと、知らない女の方が出てきて、驚いた顔でみつめるので、柔らかな所だと腰を下した場所は木炭の粉が置いてあった所でした。命が助かった安心で真黒な手で顔や足をなでたから黒人と間違える人相となっていたからです。間もなく、馬場さんの弟さんが出てきて屋内に入れていただき、逃亡の顛末を申し上げました。同情してくださって空腹でしょうと御飯を頂戴し、休養するようにと押し入れに寝床を敷いてくださり、一日

一夜眠り続けました。三日間ほどは外出しなかったが、別れた皆さんの安否を知りたく、洋服、帽子を借り、変装をして二キロ離れた佐藤さんの住宅を尋ねることにしたので。道を歩くのにも力がいって足が固くなり、進むに遅く道端で立小便するのにも付近の様子を窺いながら、これが逃亡者の惨めな運命かと涙が頬を流れました。

佐藤さんはちようど在宅で、心配していたところでしたと迎え入れてくださって、逃亡した経過を申しますと住んでいた家に戻るのには危ないからと、佐藤さんに親切にしてくださいと満州国中央銀行総務課長さん宅へ行くことを勧めるのです。一面識もないので少し躊躇ちゆうちよしました。今は「溺れる者は藁をも掴む」との例えにより同行することになりました。御主人は八路軍に呼びだされ不在でした。奥様が一人で佐藤さんのお話に同情し、屋内へ入れてくださった。奥さんは佐藤さんと同じ熊本県出身で、出征している我が子に似ていると言われ、懇意にされていたので案内をしてくれました。銀行の課長ともなればすべてが豪邸であつ

て恐縮しました。その夜は二階に宿泊することになり、お話によると「非常の場合はこの扉を押すと開き、屋根裏に通じています」と教えを受け床につきました。本当に心身共に疲労していたので、横になったとたんに眠ってしまった。いびきをかいていたらしいが、深夜に八路軍の数人の兵士がきて二階に上り、懐中電灯で照らし寝顔をみていったのです。佐藤さんは気が付くのが遅く眠ったふりをしていたとか、私は熟睡していたので知らなかった。

せつかくの好意あるお宅にもおれず、危険だからと言われ、大陸鉄道司令部でタイプリストをしていた長崎千代子さん宅へ、佐藤さんが依頼をしてくださったので、行くことにしました。途中佐藤さんの知人にお世話になったお礼に立ち寄ったので、玄関で一人で待っていました。屋内よりお客が出てきたから観音開戸で外側の扉裏に姿を隠しました。出て行った客が搜索してきた八路軍兵士だったので。危機一髪逮捕されず運がよかったです。長崎さんの家は豚饅頭屋を専門に経営している店で家族も大勢でしたから、その中へ入られてい

ただき、手伝っておりました。満人の使用人もおり数日後、満人使用人の態度が変わったからと言われ、その場で同郷の田中千万喜さん宅へ一人で逃げるようにしました。田中さん宅も数人の満人の使用人がおり、建具商を盛大に経営をしており、田中さん宅では子供と遊び過ごす数日でした。

その折、隣組の会合に出席し聞いてきた話によると、近いうちに内地に帰還するから準備をしておくように、そうして地区割により役員を選挙するようになると言われ、二人で踊り回り喜びました。いよいよ内地に帰れるか夢ではないかとの思いでした。知らぬ間に八路军は引き揚げ、中央軍が進出してきていたので、隠れていなくとも自宅へ戻ることができたのです。心配していた皆さんに内地に帰れる情報が伝わり騒ぎとなっており、早速、世話になった満人の張さんにお別れかたがた、着ていた防寒具を遺品として、一キロ離れた寛城子^{かんじょうし}まで届けに行きました。彼は大陸鉄道司令部に勤務し、満人使用者の主任であり親しい仲であったから、顔をみた途端に奥さんと共に声をだし泣き別れを惜しむの

です。満人は信頼する人には信義は絶対に堅く、心を引かれながら別れを告げました。

帰り道に関東軍倉庫前を通過しましたが、終戦前までは、見渡す限り広い場所に山積みされた食糧調味品などがあり、厳重な監視により守られていたのです。今は人影なく物資は山積みされたままであり、再三の八路军と中央軍の戦闘があり、行政も双方が掌握したのです。このままに放置しておけば、腐敗するか、鳥のえさになるだけです。日本国民の汗と努力によって醸出された物資も、敗戦国となれば我が物とならず複雑な思いでした。

広野の水平線に太陽が真っ赤に空を染め傾いてきたので急いで帰宅しますと、既に帰還組織本部が設けられ、隣組を通じ知らせがあり、病気や市街戦による流れ弾に当たったり、その他のことで死亡された人たちの遺骨を収集し、東洋一と言われた広い新京市競馬場に埋葬することになりました。隣にいた疎開者の子供の納骨に同伴し、墓標として印に小石を置きました。その小石とか木片が数知れずただただ驚くのみ、競馬

場が埋葬により空地がないほどに埋められ、いかに大勢の日本人が新京市で犠牲者となったか分かりません。

昭和二十一年十月十日、午前六時新京市出立。南新京駅から発車の知らせが隣組を通じ伝達され、当日は手荷物はだれも持っていません。わずかな携帯食を持参しているのみ。満州馬二頭引きの馬車に分乗して駅に午後一時ごろ到着し、無蓋車に荷物のように詰め込まれ乗車をした。途中の小便を男性は列車が動いても立小便で済みますが、時折、霧となって顔に飛んできました。女性については顔の色が変わり熱がでた者もあり、臨時に大風呂敷で包囲し無蓋車の片隅へ小便所を設けたのです。大便については、給水などで停止があり貨物車の下を利用しました。また駅のないところにくると列車を停止させ、乗務員が女性を出すように要求するので、輸送代表団長になられた方が頭を痛めたことだと思えます。幸いにも「皆さんのためになります」と名乗りでた方がいましたので、本当に有り難く頭が下がりました。

普通列車では八時間で奉天市へ到着するのに二十四

時間経過し奉天駅に着き、駅裏側の日本人経営の硝子工場跡に二晩、着の身着のまま宿泊し、錦州市を經由コロ島に至り一週間、庁舎の跡に高粱穀を敷き、借り毛布で暮らしました。入浴はなく、ただ内地に上陸を夢に見て毎日待ちわびるのみでした。

昭和二十一年十一月十日、待ちに待ったアメリカの上陸用舟艇が入港し、三百人を割り当て乗船することになりました。一列縦隊に乗船する際、入口に立っていた満人が胸のポケットにさしていた万年筆と、刀をつるしていた半革のひもに目を付け取りあげられました。既に新京市にいるときソ連兵に時計は奪われ、着ている作業衣のみになり、大陸で十有余年間働いた恵みは皆無く、あきらめの悪い離陸になったのです。

玄界灘の波荒れて内地の佐世保港に入港。伝染病予防のため船内で十四日間停泊し、異常がないので呉海兵隊跡に上陸し、兵舎に一泊、裸体にされ頭上からDTを振り掛けられ、腕章と軍服が渡され着替えをし自由行動で解散となりました。途中、折尾駅にて下車、同伴した娘の郷里、福岡県直方植木にて二泊休養し、

帰郷したのは昭和二十一年十二月三日午後六時三十分でした。

ごぶさたしていた親戚に懐かしい声と笑顔を見に回り、珍客だとのことで迎えてくれ、嬉しく思いました。帰郷を知り、妻と三歳の幼児も駆けつけ、無事であったことを喜びました。朝鮮京城へ疎開してより一年有余の間、音信不通でした。妻は、実家で農業の手伝いをして暮らしており、帰路を尋ねますと朝鮮京城の小学校に疎開してから数カ月を過ごし、戦争終戦により、大韓国民である人々が氣勢をあげ、集団で日本人の滞在する所へ押し寄せるので、子供の泣くのと恐怖で毎日を過ごしたそうです。共同生活であったから一緒にきた兵隊さんが守ってください、大変助かり、いつ帰国できるかと心配しておりましたら、幸いアメリカ軍が朝鮮半島釜山港へ上陸する三日前、京城を出立し、兵隊さんが内地に帰るということで護衛をしてくださったため、帰郷することができたとのことでした。当時、内地は必需品すべてが配給で物価が日ごとに上昇しており、妻と子供と一緒になれたからには、ま

ず住居について先に相談したところ、物置の荷物を外に出し改造してくれたので住めるようになり、三人の食事ですが、初めは兄弟たちの援助により生活をしました。その間に収入の道を考えていたが、伯父が役場吏員であつて、今度農地改革施行に伴い、書記を雇用する勤めがありました。当時プロカーが流行していましたが、姉の紹介で千口草履の注文をとるよう言われ、一日弁当を持参し知らない家を訪問しました。最初の家で断られたので、それ以上勇気がなくて豊橋市の焼け野原をみて帰りました。長い間給料生活者だったので、他人の家に「御免ください」の言葉がでない恥ずかしさでは商売は駄目だとあきらめ、役場へ書記として農地改革に従事することにいたしました。続いて農林省作物報告事務所へ移籍し、農林事務官として定年まで新城市、岡崎市と転勤、豊橋市において退職いたしました。健康維持のため地区育成会の子供たちに剣道を指導し現在に至っております。

現在、八十二歳。

【執筆者の横顔】

川口吉夫氏は、愛知県長篠村で、大正三年一月に生まれた。郷里の尋常小学校高等科を卒業後、実業補習学校二年修了して、現役志願し、豊橋騎兵連隊に入営、昭和七年九月二十八日に満州へ派遣の命が下る。深夜家族にも告げず、愛馬と共に貨物有蓋車で豊橋駅を出発した。大連に上陸後は全満州の各地域で転戦し、昭和八年十二月二十日興安南省の通遼市で現地除隊した。直ちに新京の関東軍大陸鉄道司令部に勤務採用されたが、脚気の病にかかり休職して治療に専念して治療、昭和十二年四月で復職した。

間もなく、張鼓峰事変、ノモンハン事変、更に大東亜戦争勃発してからの軍隊輸送業務に忙しかった。

昭和二十年八月十五日以後は無警察となり、治安秩序は乱れ恐怖社会へと一変し、生きてゆくためには己れ自身で守る以外にない。

川口吉夫氏は、いち早く家族を朝鮮に疎開させた。

大陸鉄道司令部は、ソ連軍使の指示で武装解除され、捕虜となって集団生活に入った。

草場辰巳司令官以下十五人はソ連の飛行機でモスクワに送られた。川口吉夫氏は上司の指示により「軍人ではないから、新京に知人がおれば、頼って行くがよい」と言われたので、ロシア語通訳の有賀氏と相談して捕虜集団生活から脱走することを考えて断行し成功した。二人は収人の道はなく、相談して別れて暮らすことになり、川口氏は大陸鉄道司令部で別れる際、酒井主計少尉から受領した五千円を胴巻きに入れて必要に応じて使用していた。

そのころ、中国中央軍から、日本人の武器を隠匿している者から武器収集を頼まれた。拳銃一丁二千円、軍刀一振五百円の斡旋料を支払うという仕事である。このことは満人の通訳から暴かれて、川口氏は収容所に入れられ、拷問が繰り返された。

武器の隠匿は重罪の死刑を執行される。それと同罪になるから覚悟するように宣告された。そこで脱走の計画をたてて断行し成功した。危機一髪というところで、運も良く、二回にわたり生命を保ち長らえてきた機転のきく才覚抜群の士である。

昭和二十一年、郷里に引き揚げてから生家の世話になり、長篠村農地委員会の書記に採用されて生活の安定を見付けた。

昭和二十四年には農林省の統計調査事務所に農林事務官に任命をうけ、昭和五十年定年まで勤務できた。

現在は地区育成会の子供たちに、世の中は礼に始まって礼に終わる、と剣道の指導に余生を送っている信念の川口吉夫翁である。

(他)引揚者団体全国連合会

副理事長 結城 吉之助)

私の歩み

愛知県 佐々木 大 吾

私は昭和二年、長野県下伊那郡阿南町新野(旧且開村)の農家の五男に生まれました。

昭和十七年、尋常高等小学校の高等科を卒業しました。その折に、担任の先生から、政府の政策の満州開

拓義勇軍について話を聞かされました。それより以前に、満州に移民した人が帰ってきたときにも、広い満州の話を聞いていました。私は、この山村のように狭い所では、分家する余地は無いと考えました。私も満州へ行って開拓農民となり、成功したいと大きな希望を持ち、成功後を夢見ながら、また、開拓義勇軍に入るのも国のためと決意しました。

長野県上下伊那郡で、一個中隊が編制された昭和十七年三月二十五日、満蒙開拓義勇軍、内原訓練所河和田分所四大隊第四十一中隊、原中隊の隊員として、入所いたしました(同年、長野県で四個中隊編制)。

分所で二カ月の基礎訓練を受けた後、五月十五日、敦賀より出港しました。満州国北安省嫩江(のんかう)県伊拉哈(いらが)の青年義勇隊、伊拉哈訓練所へ入所したのは、五月二十一日のことです。

それから三カ年の現地訓練が始まりました。農作業軍事訓練でしたが、開拓団へ行ってから、団員でなんでもできるように、各種、特技訓練も受け、入植の準備もいたしました。私は、木工訓練を受けました。